

安楽死をめぐるアメリカ宗教界の対応

生 駒 孝 彰

I・はじめに

1999年2月28日、日本で初の脳死による臓器移植が行われた。これに対し、日本の宗教界はその是非をめぐるさまざまな議論がなされている。「いのち」の問題は宗教にとって最も重要なテーマだが、日本の宗教界はそれについてあまり積極的な発言をしてこなかった。だが、脳死による臓器移植がなされてから生命倫理について宗教界からの発言が求められるようになった。その結果、各宗派ともかなり苦慮している。

20世紀になって、我々は近代医療の恩恵を受けてきた。だが、同時に「いのち」の概念を変えてしまうような課題につきつけられることにもなった。欧米の宗教界、なかでもアメリカのキリスト教界では生命倫理に関する種々の見解を出してきた。時には苦渋の選択をしたと思われるものもある。参考までにその対応が求められたものを列記すると次のようなものがある。

避妊、人口受精、体外受精、妊娠中絶、選別の中絶、選別の出産、胎児診断、脳死と心臓死、臓器移植、遺伝子操作、遺伝子治療、クローン動物、尊厳死、安楽死、等々。

これらの問題に対し、宗教界からの発言や対応としては、1957年、ローマ教皇ピオ十二世が“人の死がいつ起こるかは医学の判断するべき問題”と発言したのが良く知られている。その後、カトリック教会は、60年代の第二回バチカン公会議において

「生と死に関する倫理問題」、74年に「中絶に関する宣言」、80年に「安楽死についての声明」、87年に「生命のはじまりに関する教書」、95年に「いのちの福音」、98年に「ヒト・ゲノム—人格と社会の未来」等々を出している。

いっぽう、プロテスタントも世界教会協議会 (World Council of Churches) などを中心となって生命倫理と宗教について次々と見解や対応を発表している。プロテスタントの場合、特にアメリカではカトリック教会以上に積極的な姿勢を示している宗派もある。

すでにふれた生命倫理に関するもののなかで、例えば、臓器移植についてはほとんどの宗派が脳死による臓器移植を認めている。だが、妊娠中絶については、1973年に合法とされたものの、賛成派のプロ・チョイスと反対派のプロ・ライフとに分かれ、宗教界が二つに分かれて対立している。アメリカ宗教界が現在、そして今後、その対応が迫られるであろうとされているのが、遺伝子操作と安楽死についてだ、といわれる。そこで、小論では安楽死についてアメリカ宗教界、なかでもキリスト教界の考えを調査することにした。

II・安楽死・その背景

終末期の患者が死を選択する権利があるか否かが問われる時、必ず論じられるのが尊厳死と安楽死についてである。自発的な死に関するこの両語は、いろいろな言葉が

使われているが、その意味や解釈が少しずつ違う。一般に尊厳死は、“一個の人格としての尊厳を保って死を迎えること”（岩波「広辞苑」94年版）“生命維持装置などをつけず、人間であることの尊厳さを維持して死ぬこと”（学習研究社「学研国語大辞典」95年版）とされている。いっぽう、安楽死は“病人を苦痛の少ない方法で人為的に死なせること”（前出「広辞苑」）、“助かる見込みのない病人をその苦しみから救うために、本人の希望によって苦痛の少ない薬品などで死なせること”（前出「学研国語大辞典」）と説明されている。

これらの説明からも理解できるごとく、生命を引き延ばす目的の延命処置はせずに、自然な形で死を迎えるのが尊厳死であり、身体的な苦痛を除く目的で本人以外の手により死を迎えるのが安楽死である。その違いは、前者はあくまで“自然な”形で死を迎えるのに対し、後者は、“他人の手によって”死を早める点にある。

アメリカの場合、1976年、カリフォルニア州で「自然死法」が成立した。これは、尊厳死を認める法律である。また、1987年、ポルトガルにおいて行われた第34回世界医師会総会において尊厳死の権利を認めるという「患者の権利に関するリスボン宣言」が採択された。なお、アメリカにおいては、1990年、尊厳死は合憲であるという決定を合衆国最高裁判所が決定を下した。いっぽう、安楽死の方であるが、リスボン宣言においては、尊厳死を認めたものの、安楽死は認めない、としている。

1990年代になると、安楽死も認めるべきだ、という声がアメリカで聞かれるようになってきた。それは、ある意味で当然ともいえる。なぜなら、死をめぐる環境が変わってきたからだ。その最初の契機となったのは、1960年代から70年代にかけての“改革の時代”である、といえよう。その時代は、それ以前の価値観とは違ったものが出てきたが、個人の権利の主張はそのうちの

一つであった。医療に関しては、患者の治療の権限はすべて医師が持っていたのに対し、1972年、「患者の権利章典に関する宣言」というものが出された。その第二項に“患者は自分の診断、治療、予後について完全な新しい情報を自分に十分理解できる言葉で伝えられる権利がある”と書かれている。これはインフォームド・コンセントの権利を認めるものであるが、その結果として、患者には死ぬ権利もある筈だ、という考え方となっていたのである。このような権利の要求以外にもいくつかの理由で安楽死を認めるべきだ、という動きが出てきた。

まず、医療技術の進歩をあげることができる。現代医学では、自分では立ち振る舞いにも不可能な病人であっても、場合によっては何年でも生きられる。そのような病人がいたら、家族や周囲の人々への物質的・精神的負担は非常に大きい。また、患者の人間としての尊厳、QOL（Quality of Life）が問題になってきた。その結果、安楽死が取り上げられるようになった。特に回復の見込みがない患者で、痛みを苦しんでいる場合は、本人はもとより、家族や周囲の人々が安楽死を真剣に考えるようになった。

次に高齢化社会の到来である。高齢者人口の増加の結果、医療技術の進歩ともあいまって、死亡の原因となる病気の種類に変化が出てきた。20世紀前半、病気のほとんどが伝染性のものであった。だが、70年代頃から、心臓病、癌、高血圧、等々の生活習慣病が上位を占めるようになった。生活習慣病で苦しむ高齢者は多い。近代医療でも完全に治癒するのは難しい。その結果として、安楽死も選択肢の中に入れるべきだ、とする人々が出てきた。ちなみに、1970年代と80年代とを比較すると、自殺者が数倍になっている。特に不治の病に苦しむ高齢者の自殺が急増し、若者の自殺率の2倍以上になっているのである。更に、安楽死を

めぐるさまざまな出来事が話題になり、注目されるようになった。たとえば、カレン・アン・クインラン事件は、その一つといえよう。彼女は1975年、植物状態となるが、父親が彼女の「死ぬ権利」を主張した。安楽死は違法であったものの、法廷は父親の要求を認めた。なお、彼女は植物状態のまま85年まで生存した。

90年代になると、安楽死の合法化への動きが西海岸の州で見られるようになってきた。西海岸は個人の自由を尊重する気風が強い。それゆえ、死の決定は個人の権利と考え、安楽死を認めるべきだ、と言い始めたのである。それは、オレゴン州を中心として安楽死の権利を主張する団体である後述するヘムロック協会が実施した世論調査からもうかがえる。

ヘムロック協会は、1990年、世論調査機関のローパー・ポール (Roper Poll) と共同で世論調査を実施した。質問は、「患者が終末期にあり、回復の望みがなく、苦痛の状態にある患者が医師に生命を終わらせることを望んだ場合、医師はそれに応じるのを法律で認めるべきか」というものであった。それに対し、認めるべきだ—64%、認めてはならない—24%、どちらとも言えない—13%、という結果になった。このような世論調査の報告もあって、安楽死の合法化は住民投票によって決めるべきだ、という声が聞かれるようになった。

まず、1991年にワシントン州が、次いで92年にカリフォルニア州で住民投票が行われた。だが、両州とも反対派の方が多く否決された。しかし、94年、オレゴン州で合法化を問う住民投票が行われた。結果は、賛成—51%、反対—49%となったのである。提出された法案は、「尊厳死法案 (Death with Dignity Act)」と呼ばれ、内容は、“6ヶ月しか余命のない患者は、医師に死のための薬（錠剤や液体）の処方箋を依頼できる”というものであった。この法案に対し、オレゴン医師会は中立の立場を取っ

たが、中絶反対市民団体、自殺幫助反対団体、そして、オレゴンのキリスト教界では最も信者数が多いカトリック（ローマ）教会が反対したのである。これらの団体は、違憲訴訟をおこした。合衆国連邦最高裁判所は、「違憲である」として、法制化差し止めの命令を下した。ところが、オレゴンの州議会は、97年、再度法案を提出し、11月4日に住民投票が行われ、安楽死法案に賛成する者が60%を越え、合憲となったのである。

『クリスチャニティー・ツデー』(Christianity Today、June 14、99) 誌によると、この法案にもとずいて致死薬を要求した患者は、98年のみで23人、としている。なお、オレゴンに追従しようとしている州が98年で6州と報告されている。

オレゴン州が安楽死を最初に認めた州となったのは、いくつかの理由が考えられるが、やはりヘムロック (Hemlock) 協会の活動が盛んな点をあげることができる。ヘムロックとは毒草の名称で、ギリシャ・ローマ時代には自殺のために用いれたようだ。この協会は、デレク・ハンフリー (Derek Humphry) が1980年に創設したもので、彼は肉親の安楽死を手伝った体験をもとにして *Final Exit* (邦題「安楽死の方法」) という本を書いている。ちなみに、この本は、60万部も売れた、といわれている。協会は、終末期においては、「安らかで、静かな、確実で、しかもできるだけ早く死を迎えることが、尊厳ある死である」とし、法律によって死の処方箋にもとずく薬が得られるべきである、と主張している。その活動は、雑誌やインターネットを用いての広報活動、講演会の開催、終末期患者へのケア・フレンド・プログラム、等々。筆者は2000年3月1日に同協会のホームページを見たが、アメリカには80の支部と27,000の会員がいる、としている。

III・アメリカキリスト教界とEuthanasia

安楽死と尊厳死を英語で表現する場合 euthanasia という語が使われるのが一般的である。これはギリシャ語の eu (良い) と thanatos (死) という二つの語から作られたものだ。日本語ではすでに説明したごとく、安楽死と尊厳死を区別しているが、英語の euthanasia はやや曖昧に使われている。安楽死を意味する場合は active euthanasia, physician assisted suicide, positive euthanasia、等々が使われている。いっぽう、尊厳死の方は、passive euthanasia, negative euthanasia 等が使われる。なお、mercy killing (慈悲死) という言葉は両方に使われている。従って、euthanasia という語のみではどちらの意味に用いられているかを判断するのは困難である。

いずれにせよ、安楽死も尊厳死も人間の生命と直接関係の深いものであり、それに対する宗教界の考えに大きな関心が寄せられている。そこで、筆者は、アメリカ宗教界がこの問題にどのような見解を示しているかを調査することにした。

アメリカには世界中の宗教がある、と言っても過言ではないほどさまざまな宗教が伝道活動をしている。だが、アメリカ人の80数%がキリスト教徒であり、その社会的影響力も他宗教と比較にならぬほど大きい。紙数の関係もあるので小論ではキリスト教界のみを対象として調べることにした。

キリスト教には多くの宗派がある。少なくとも600以上、いや1000以上とさえいわれる。それらのすべての宗派について調査をするのは不可能なので50ほどの宗派を選ぶことにした。選定は次の基準に従った。

- 1・教義、特に聖書理解と社会問題への対応によって自由主義的、保守的、中間の三つのグループに分類。
- 2・教義や実践面で特異な宗派。
- 3・カトリック教会 (ローマ)。アメリ

カーの大宗派で、プロテスタントと一線を引いているため。

上記の三基準である程度キリスト教系の宗派の分類が可能であるが、50の宗派を選ぶ基準として次の点をも考慮した。すなわち、信者数、歴史と伝統、社会問題に対する対応で特に注目されてきた宗派。以上の点をも考慮して50の宗派を選び、次のような質問を作った。

貴宗派では euthanasia についてどのようにお考えですか。また、それについて公式の声明を出されたことがありますか。

この質問文をインターネットで各宗派のホームページへ、1999年11月10日から2000年3月10日にかけてEメールで送付した。その結果、2000年3月20日迄に25の宗派から回答があった。なお、すでに説明したごとく、euthanasia という語が安楽死と尊厳死の両方に使われていることから特に区別せずに、回答を見てから判断することにした。

次に25の宗派からの回答をalphabet順に紹介する。

1・アメリカ・バプテスト教会 (American Baptist Church)

バプテスト系では最も自由主義的な宗派として知られる。現在の信者数は150万。同派は社会問題について常に積極的な発言をしている。1990年の総会で「生命に関する決議」が提出され、次いで91年にも再度提出され、それが確認された。そこでは、自然死、終末期患者へのケア、患者の尊厳、等々について記されている。文中より尊厳死を認めているのが読み取れるが、安楽死についての記述はない。インターネットで同派の聖職者の意見を聞いてみると、安楽死に対して賛成派と反対派とがあるのが理解できた。筆者としては、同派は中立的態

度を取り、個々の信者と聖職者の判断にまかせている、との印象を持った。

2・アメリカ・アングリカン教会 (Anglican Church in America)

同派は聖公会の女性聖職者の任用、改訂版祈禱書等の採用に反対して聖公会から独立したものである。現在の信者数は不明。George Langberg師から中絶およびeuthanasiaに反対というコメントをインターネットで送付してきた。

3・アッセンブリー・オブ・ゴッド (Assemblies of God)

異言や癒しの賜物を強調するペンテコステル系の保守派の宗派。現在の信者数は230万。Euthanasiaについての公式発表はないものの、本部のBrett Risner師から安楽死は認めないが、尊厳死についてはやや肯定的コメントを寄せてくれた。

4・カトリック (ローマ) (Roman Catholic)

アメリカの信者数は6,200万。一宗派としては最も信者数が多い。19世紀から20世紀前半にかけては二流の宗派とされていたが、信者数の増加、あらゆる分野で指導的な役割をはたす信者が増えたこともあってその社会的影響力は大きい。カトリックはヴァチカンのローマ教皇を地上におけるイエス・キリストの代理人と位置づけているので、ヴァチカンの方針は絶対的といえよう。Euthanasiaについては、1980年、教皇庁よりラテン語で三千語にもなる「安楽死について」の声明が出されたが、そこでは尊厳死を認めている。だが、安楽死は認めていない。95年、教皇ヨハネ・パウロ二世は、「生命の福音」という声明を出したが、“安楽死は人を殺す行為”として否定している。なお、安楽死に関する発言として、アメリカで関心が寄せられたものの一つが、ジョセフ・バーナーディン (1928-

96) の遺言がある。彼は、カトリック枢機卿で、信者以外からも尊敬されていた。癌の苦しみのなかで次のような遺書を発表した。“いま、私は生命を授かったことに深く感謝しています。自殺補助による安楽死の権利を認めることは・・・「完璧」な生でなければ生きるに値しないというメッセージをひろげることになりかねません。”彼のこの遺書は大きな反響を呼んだ。いずれにせよ、同派の安楽死に対する厳しい態度は当分の間変わらないであろう。

5・末日聖徒イエス・キリスト教会 (Church of Jesus Christ of Latter Day Saints)

一般にモルモン教会と呼ばれている。シオン (神の国) の樹立を目標とし、聖書と「モルモン経典 (書)」を基本として教義を説く、ユニークな宗派。教義的には保守的でアメリカの信者数は450万。筆者が受け取ったEメールでは“euthanasiaは神の教えに反する”と記されている。尊厳死、安楽死については明記されていないものの、『モルモン百科事典』(Encyclopedia of Mormonism, Macmillan Publishing, 1992, p972) によると、“生命維持装置の使用又は拒否は尊重すべきである”と書かれている。それゆえ、尊厳死は認めている、と考えて良からう。

6・ナザレン教会 (Church of Nazaren)

日常生活における規律を重視し、聖霊の賜物を強調する保守派の宗派。1997-2001年の同派のマニュアルに「倫理・社会問題」の項目があり、そこには、中絶、安楽死、そして、尊厳死も認めぬ、とある。アメリカでの信者数は60万。

7・北米クリスチャン・改革派教会 (Christian Reformed Church in North America)

改革派教会の分派。教義は極端な保守的

ではないものの、1972年以降、中絶に反対している。Euthanasiaについては公式の見解を出していない。同派の広報部のDavid Engelhard師によると、2000年度に生命倫理についての公式発表をするとのこと。信者数は2万。

8・クリスチャン・サイエンス (Christian Science)

同派はキリスト教でありながらユニークな教義を説いている。神が創造したすべてのものは善である。それゆえ、悪とされる罪、不正、貧困、病気、死などは本来存在しない、と説く。死が存在しないのであるから、尊厳死や安楽死の概念はない。だが、筆者への本部からのEメールでは“尊厳死や安楽死に協力するのは精神的な妨げとなります”と書かれている。なお、同派は信者数を一切公表しない。

9・エписコパル・チャーチ (聖公会・Episcopal Church in USA)

英国々教会のアメリカでの宗派。信者は上流社会に多く、信者数は230万。終末期の患者について1980年、英国々教会が「社会的責任」という決議文を発表した。その中に“医師と看護婦（士）は終末期の患者の尊厳を守るべきである”と書かれている。これをもとにして、同派は1991年、尊厳死を認めることを同派の総会において決議した。ただし、安楽死は認めていない。

10・アメリカ福音ルーテル教会 (Evangelical Lutheran Church)

1987年にルーテル系の宗派の合同によって設立された。アメリカでの信者数は530万。社会問題や宗派間の協調に熱心で、リベラルなプロテスタントの宗派。合併の際、中心となったルーテル教会（当時の教会名・Lutheran Church）では、82年の総会において尊厳死を認める決議をしている。ただし、安楽死は非キリスト教的と否定した。

現在もこの方針は変わっていない。

11・エホバの証人 (Jehova's Witness)

地球の終末を強調し、その後は信者のみが生き残り、少なくとも千年間は祝福を受ける、と説く。アメリカの信者数は100万。教団本部の公式の発表はないものの、輸血拒否の例から近代医療に疑問を持っている、と考えて良からう。何人かの信者とEメールで交信したが、尊厳死は一応認めているが安楽死は認めていない、と考えられる。

12・メトロポリタン・コミュニティー・教会 (Metropolitan Community Church)

同性愛者の宗派として知られる。エイズ問題に最も熱心である。教義は保守的からリベラル迄さまざまなものが入っている。Euthanasiaに関するコメントは正式にはないもの、信者や聖職者はやや否定的である。安楽死と尊厳死との違いに関するコメントは得られなかった。アメリカでの信者数は2万数千。

13・救世軍 (Salvation Army)

犯罪、失業、貧困、その他さまざまな社会悪と戦うのを目的とする救世軍はユニークな宗派である。教義は保守的である。アメリカでの信者数は47万。1998年に出された「Euthanasia および自殺幫助についての見解」という公文書があるが、そこには、“終末期の患者が過度の医療や苦痛の緩和を目的とした治療を拒否する権利がある”と記されている。ここでは、尊厳死は認めるものの、意図的に死に至らしめる安楽死を否定している。

14・セブンスデー・アドヴェンチスト教会 (7th Day Adventist Church)

イエス・キリストの再臨信仰を基本とする。健康食品や医療施設の普及で知られるものの、教義は保守的とされている。同派のロマリング大学付属病院は臓器移植で著

名な点から近代医療を重視する姿勢がうかがえる。Euthanasiaに関しては、“近代医療を受けても、むやみに延命措置はすべきではない”としている。1999年、同派の総会において、「死にゆく人のケアについての声明」が発表された。それによると、尊厳死は認めるが、安楽死は認めない、としている。アメリカでの信者数は80万。

15・クエーカー (Society of Friends)

宗教的体験と社会運動を重視するユニークな宗派で、社会改革に関してリベラルな立場のもとで積極的である。ただし、生命倫理については、たとえばプロ・ライフの立場を取っている点から保守的と考えて良からう。Euthanasiaに関しては宗派の公式の発表はないものの、安楽死はもとより尊厳死についても否定的なコメントをしている。アメリカでの信者数は10万。

16・合同キリスト教会

(United Church of Christ)

ピューリタンの伝統を引く自由主義的な宗派の代表とされている。アメリカでの信者数は100万であるが、近年、信者が減少している。1972年の同派の大会で“回復の見込みがない患者は医療を拒否する権利がある”という決議文を採択した。ここでは、尊厳死についてふれていないが、91年6月に開催された同派の大会で72年の決議文の再確認がなされた。次いで、“人間は尊厳をもって生きる権利があると同時に、尊厳をもって死ぬ権利がある”としている。自己の選択権は明示されているが、安楽死という言葉は使われていない。

17・合同メソジスト教会

(United Methodist Church)

メソジスト系の宗派は20以上もあるが、同派は信者数860万で信者数が最も多い。1960年代以降、社会問題への関心を高め、自由主義派を代表する宗派の一つである。

88年の同派の総会で「合同メソジスト教会規律書」が採択されたが、その中に「社会問題についての基本」があり、そこに“すべての人が死の尊厳を有するのを尊重する”と記されている。次いで92年の総会では「信仰あるキリスト教徒としての生と死」という条項を採択した。そこでの中心は、尊厳死を認める点にあるが、その理由について“個人の権利と意志を尊重するゆえに”という理由をあげている。だが、安楽死についての記述はない。

18・南バプテスト教会

(Southern Baptist Convention)

神学的にも政治的にも保守派を代表するプロテスタントの宗派で、信者数はアメリカのみで1700万。信者数がカトリックに次いで多いこともあって、その発言は社会的影響が大きい。Euthanasiaについては80年代以降さまざまな形で発表している。たとえば、87年9月の同派のクリスチャン・ライフ委員会では“中絶、幼児殺し、euthanasiaに反対”としている。また、88年の大会では“自然死は神聖である、living willがある場合のみ尊厳死を認める”としている。もっとも、同派は多数の信者や聖職者がおり、しかも各教会にかなりの自由が与えられているので、euthanasiaについても種々の意見があるようだ。

19・ユニテリアン・ユニヴァーサリスト

(Unitarian Universalist)

プロテスタントの中で最も自由主義的な宗派とされている。教義については伝統的な神学とはかなり異なっていて、社会問題への発言が多い。1988年6月に開催された同派の総会で「死に関しては自己決定権を尊重」という決議文を採択した。そこには、“終末期の患者は自己の死について選択する権利を有する”と書かれている。もっとも、個々の聖職者や信者の考えを尊重する同派であるから、euthanasiaについては

種々の意見があるようだ。たとえば、パサディナ・ネィバーフード教会のB・L・Loverly師は“教会員（彼が駐在する）の69,6%が安楽死に賛成している。それゆえ、認めるべきだ”としている。なお、同派は安楽死を認めている宗派だ、という論文もある。ただし、宗派としては“自己決定権の尊重”としているだけである。アメリカでの信者数は20万。

20・ウエスレアン教会（Wesleyans）

同派はメソジスト派より分派したもので、アメリカでの信者数は12万。リベラルと保守派の中間的教義を説く。同派はliving willと家族の同意があれば尊厳死を認める、としている。ただし、安楽死は否定。

IV・考察

Euthanasiaに関して20の宗派の回答を紹介したが、その結果をまとめると次のようになる。

- 1・尊厳死も安楽死も認めている宗派。
公式声明で認めている宗派はない。
- 2・尊厳死は認めているが、安楽死については個々の聖職者や信者の判断に任せている宗派。自由主義的なプロテスタントの宗派に多い。
- 3・尊厳死は認めているが、安楽死は認めない宗派。この方針は、カトリックをはじめ、自由主義的、保守的なプロテスタントの宗派。さらには特異な宗派にも見られる。
- 4・尊厳死も安楽死も認めていない宗派。
保守派のプロテスタントの宗派および特異な宗派に見られる。
- 5・Euthanasiaについては何らのコメントを出さず、今後の課題としている宗派。

尊厳死は当然であるが、安楽死も認めるべきだ、とする人々は次のような理由を根拠としている。

- 1・苦しみからの解放—近年は痛みを緩和する医薬品の開発が進んでいるが、完全に痛みをなくすのは不可能である。したがって、長時間患者を苦痛の状態におくのは無慈悲である。
- 2・医療費の問題—医療技術の発展によって、終末期の患者であっても長時間の生存が可能になってきた。当然医療費が家族はもとより社会的にも大きな負担となってくる。また、医師は医療過誤訴訟を恐れて回復の望みがなくても高額な医療で最善の治療をする傾向がある。
- 3・終末期や植物状態ではQOLは低く、人間としての尊厳がなくなっている。
- 4・人間には誰もが自己決定権がある筈だ。死は極めて私的なものであるから、本来、他が関与すべきではない。もし、本人が死を願っているならば、それを尊重すべきである。

なお、宗教的立場から安楽死を認めるべきだ、とする人々は次のような理由を上げている。

- 1・『旧約聖書』の創世記（3－22）には“主なる神は言われた。「見よ、人はわれわれのひとりのようになり、善悪を知るものとなった。彼は手を伸べ、命の木からも取って食べ、永久に生きるかも知れない。」これは、明らかに個人の自由意志が尊重されているのを意味している。それゆえ、死に関しても自己決定権があるのは当然。
- 2・神は苦痛の中で死を迎えるのを認められるような無慈悲なお方ではない。
- 3・「人間の生命は神聖」という理由で安楽死に反対する人が多いが、なぜ人間のみが神聖なのか。我々は他の動物の犠牲の上になりたっているのではないか。まさに他の動物の生命を無視している。都合の良い時のみ神聖とするのはおかしい。
- 4・「安楽死はまさに神のように振る舞

うことだ」という理由で反対する人々がいる。だが、近代社会は、政治、経済、その他さまざまな分野で神のように振る舞ってきたではないか。その結果として近代文明を手に入れたのではないか。また、家族計画の名のもとに、避妊や中絶で、欲しい時に子を生み、欲しない時は生まない、としている。更に、戦争では正当防衛、犯罪者に対しては刑罰等によって人間の生命を神のように勝手にコントロールしているのではないか。

- 5・聖書を見ても、どこにも極限状態で自ら命を絶つことについての記述はない筈だ。

いっぽう、安楽死に反対する人々は次のような理由をあげている。

- 1・安楽死を認める人々は、終末期の患者の苦痛に同情する人が多い。だが、それは一時的な感情に心が動揺しているに過ぎない。患者と共に苦しむのが耐えられず、早く逃避したいとの自己中心的な気持といえる。患者は死を望んでいても本心では愛を求めているのだ。本当の気持を理解すべきである。
- 2・もし、安楽死が認められると、患者への十分なケアが弱まり、適切なケアや治療の代わりに安楽死が当然という傾向が出てくる。その結果、高齢者や弱者への「危険な坂道」（社会的に存在意義がないとの理由で排除する）が認められる危険性がある。
- 3・末期患者は家族や社会への気遣いから“死ぬ義務”を感じるようになる。
- 4・安楽死は医師に殺す権利を与える。その結果、医師への信頼がなくなり、医療の倫理性が問われるようになる。
- 5・人間の生命は本来自然にまかせるべきものである。だが、科学の発展のもとに自然にゆだねるべきものに更に手を入れ過ぎた。その結果として、現代社会は多くの問題に直面している。安

楽死を認めると、同じような過ちをおかすことになる。

さて、宗教的理由で反対する人々は、やはり聖書をもとにする場合が多い。そこで、そのうちの典型的なものを紹介してみる。

- 1・人間は神聖であるゆえに自分の都合によって生死を決めるべきではない、として、創世記（1－27）の“神は自分のかたちに人を創造された。・・・”を引用したり、コリント信徒への手紙1（6－19）の“・・・あなたがたの体は、神からいただいた聖霊が宿ってくださる神殿であり、あなたがたはもはや自分自身のものではないのです”を引用し、安楽死は神の言葉に反するものだ、とする。
- 2・申命記（32－39）には“・・・わたしのほかに神はない。わたしは殺し、また生かし、傷つけ、またいやす、・・・”とあるが、これより生死を決定する権利は神のみが有している、とする。
- 3・いかなる理由があっても他を殺すことは神の教えに反する、として最も多く引用されるのが出エジプト記（20－13）の“あなたは殺してはならない”である。十戒の中のこの言葉は特に良く知られているが、患者自身が望むとはいえ、安楽死もこれに反するとしている。
- 4・十戒の“あなたは殺してはならない”に対し、戦争や殺人者に対する刑罰はどうか、という疑問には創世記（9－5）の“あなたがたの命の血を流すものには、わたしは必ず報復するであろう・・・”を引用して、戦争や刑罰の殺人は認められている、と主張する。だが、安楽死はこの範疇ではない、とする。
- 5・自己の生死は自己決定権によって認められる、とする人々に対し、ローマの信徒への手紙（13－1）の“人は皆、

上に立つ権威に従うべきです。神に由来しない権威はなく、今ある権威はすべて神によって立てられたものだからです”と同じローマの信徒への手紙（14－7、8）にある“わたしたちの中には、だれ一人自分のために生きる人はなく、だれ一人自分のために死ぬ人もいません。わたしたちは、生きるとすれば主のために死ぬのです。従って、生きるにしても、死ぬにしても、わたしたちは主のものです。これらの言葉より生死の自己決定権はない、とする。

これらの聖書の言葉以外にも「人間が神のように振る舞うのは神を冒瀆するものだ」「自分の苦しみを通じて、十字架上のキリストを想うべきだ」「患者の苦しみと共に分かち合うことが真のキリスト教徒として取るべき道である」、等々の理由が上げられている。

V・むすび

すでにふれたごとく、アメリカのキリスト教界で安楽死を公式に認めている宗派はない。だが、否定も肯定もせずに、聖職者や信者にその判断をまかせている宗派が増えてきた。特に自由主義的なプロテスタントの宗派にその傾向が見られる。自由主義的なプロテスタントの宗派の聖書理解は、保守派とは違っている。保守派の場合、聖書は神の言葉であるから勝手に解釈すべきではない。文字通り解釈すべきだ、と考えるのが普通だ。いっぽう、自由主義的な方は、聖書は神の霊的指導を受けたものの、それを書いたのは人間だ、とする。それゆえ、時代や場所によって解釈に違いが出てくることもある、としている。また、社会問題と信仰についても違いがある。保守派の方は、“教会の使命は信仰が第一で、社会問題は第二”とするのに対し、自由主義の方は、「教会にとって社会問題は信仰と同等に重要」という立場を取っている。生

命倫理を考える時、このような両派の違いが出てるように思われる。アメリカの宗教界でそれが明らかになった例として中絶をめぐる違いをあげることができる。自由主義派の宗派の多くは中絶を認めている。だが、保守派は認めていない。そして、条件付きで認める中間派の宗派に分けることができる。

今後、医療技術が更に発達するであろう。その結果、安楽死についての議論が盛んになるであろう。場合によっては、オレゴン州に続いて合法化へふみ切る州が出てくることが予想される。その時、中絶をめぐる違いと同じような傾向が出てくるのではなからうか。また、今後、ヒトゲノム（ヒト細胞核内の染色体内における遺伝情報）の解析が進むと、生命倫理に関する問題は更に複雑なものになる筈だ。その時、アメリカの宗教界はどのような対応をするであろうか。安楽死の対応とともにその動向を注意すべきである、と考える。

<諸団体のホームページ・アドレス>

Compassionate Healthcare Network
<http://www.chninternational.com/>
 Hemlock Society
<http://www.hemlock.org>
 International Anti-Euthanasia Task Force
<http://www.iaetf.org>
 Not Dead Yet
<http://acils.com/NotDeadYet/>
 Priest for Life: Euthanasia
<http://www.priestforlife.org>
 STR-Euthanasia
<http://str.org/free/studies/euthanas.htm>

<諸宗派のホームページ・アドレス>

American Baptist Church
<http://www.abc.usa.org>
 Anglican Church in America
langberg@attglobal.net
 Assemblies of God
BRisner@ag.org
 Catholic Church
<http://www.catholic.net/>

Church of Jesus Christ of Latter Day Saints

<http://www.lds.org>

Church of Nazaren

<http://www.naznet.com/>

Christian Reformed Church in North America

<http://www.crcna.org>

Christian Science

webwrite@cspc.com

Episcopal Church in USA

<http://www.anglican.org/>

Evangelical Lutheran Church

DSCOTT@elca.org

Jehova's Witness

<http://www.watchtower.org>

Metropolitan Community Church

<http://www.ufmcc.com/>

Salvation Army

<http://www.salvationarmyusa.org>

Seventh-Day Adventist Church

<http://www.adventist.org>

Society of Friends

<http://www.afsc.org/>

United Church of Christ

<http://www.ucc.org/>

United Methodist Church

<http://www.umc.org>

Southern Baptist Convention

<http://www.sbc.net>

Unitarian Universalist

<http://www.uua.org>

Wesleyans

<http://www.wesleyans.org>

<参考文献>

神田健次編 1999『現代キリスト教倫理
(1) 生と死』日本基督教団出版局

Larue, Gerald *Playing God*、Moyer Bell,
Wakefield, Rhode Island, 1996.

Safrenk, John Paul *Preference Utilitarianism
and Euthanasia*、UMI Dissertation Services,
Ann arbor, Michigan, 1997.

ABSTRACT

Euthanasia in American Religion

Kosho IKOMA

Euthanasia is one of the most high profile public issues being debated today in America. In order to investigate the position of Christian denominations on euthanasia I posed the following questions :

- 1 . Please explain your denomination's position on euthanasia.
- 2 . Has your denomination ever made an official statement on euthanasia?

I selected 50 denominations based on historical background, the numbers of members, and teachings and views on social issues. I sent the questionnaire by E-mail to their homepages between November 10, 1999 and March 10, 2000. By March 20, 2000 I had received answers from 20 denominations. After reading their answers I divided the word "euthanasia" into two categories, namely active and passive euthanasia. Active euthanasia is defined as the direct, active and intentional taking of human life, whereas passive euthanasia is allowing someone to die under circumstances with no intention of taking life. None of the denominations has any official statement which allows active euthanasia. However, some denominations decide to leave it to the individual saying, "God has given us the ability to make choices." On the other hand, some denominations reject both active and passive euthanasia saying, "it violates the commandment of God." But more than half the denominations studied and allow passive euthanasia and have official statements.

The State of Oregon legalized active euthanasia, and 23 patients were given lethal injections by physicians in 1998. Perhaps many states will pass bills to allow active euthanasia just like Oregon in the near future. Therefore, some denominations have started to study active euthanasia from religious points of views.